

文化 第78巻 第3・4号 一秋・冬一 別刷
平成27年3月25日発行

テレビに見る 1960年代学生運動イメージ
— 映像アーカイブ調査による 1960年代学生運動研究の展開 —

小 杉 亮 子

テレビに見る 1960 年代学生運動イメージ

— 映像アーカイブ調査による 1960 年代学生運動研究の展開 —

小 杉 亮 子

1 はじめに

1.1 本稿の背景と目的

1960年代後半、全国の大学キャンパスを舞台に学生運動が繰り広げられた。これらの学生運動では多くの場合、学生たちが、学部や学科、学生自治会を基盤に基本的には有志で「全学共闘会議」（以下、全共闘）を組織した。そして、さまざまな要求を掲げて大学当局と対峙し、授業放棄やストライキ、大学施設の封鎖や占拠を展開した。運動は短いときには数日、長い場合には1年以上にわたった。とくに高揚のピークとなった1968年と1969年には、4年制大学377校のうち授業放棄・ストライキ・施設の封鎖占拠のいずれかが発生した大学は、1968年で127校（33.7%）、1969年で153校（40.6%）にのぼった（大野 1990: 238）。さらにこうした学生運動は、反戦運動や安保反対運動など学外の政治運動と組織的・人的つながりを持ち、1960年代後半における社会運動の高揚の一翼を担った。本稿では、1960年代後半にこのように高揚した学生運動を1960年代学生運動と呼ぶこととしたい。

戦後日本社会運動史上の重大事件といえる1960年代学生運動であるが、学術研究はこれまで十分になされてきたとはいえない⁽¹⁾。2009年に刊行された小熊英二による通史的研究『1968』を皮切りに、安藤文将（2013）による言説分析や油井大三郎ら（2012）による国際比較といったアプローチが登場し、現在は議論がようやく始まった段階といえる。

1960年代学生運動のような過去の社会運動が社会学において研究対象となる場合、採用される方法論には、運動団体が残した各種文書、運動参加者の手記や手紙、行政資料、新聞、各種統計といった二次資料の分析がある（Gould 1995; Tilly 1995; Young 2001）。また、研究者が参加者にアクセスできる比較

の新しい運動については、一次資料の収集に相当する、参加者への聞き取りも行なわれてきた (McAdam 1988)。1960 年代学生運動研究でこれまで用いられたのは、このうち、運動当事者やマスメディアが発行した文書資料の分析である (小熊 2009a; 2009b; 安藤 2013)。

しかし近年、情報化の進展とともに、二次分析に用いることができる新たな資料群が登場してきている。それは、映画フィルムやテレビ番組、CM の映像資料を保存・管理することを目的とする映像アーカイブである。映像アーカイブは現在各国で飛躍的に整備が進められており、日本でも、実際に訪問し映像を閲覧することが可能な施設とインターネット上に設立されたウェブ・アーカイブとの両方が増加している (石田 2014: 134)。代表的な映像アーカイブ施設は、NHK アーカイブス (埼玉県川口市) と放送ライブラリー (神奈川県横浜市) である。前者は日本最大規模の放送アーカイブとして、NHK が放送したニュースや番組を体系的に保存しており、2003 年に運用が開始された (江藤 2008)。現在 NHK アーカイブスには、テレビ・ラジオ番組 (647,000 本)、ニュース映像 (1,768,000 項目)、ニュース原稿 (1,042,000 本)、番組台本 (38,000 冊) が保存されている⁽²⁾。後者は、NHK だけではなく民放局のテレビ・ラジオ番組や CM を収集・公開しており、所蔵コンテンツはおよそ 3 万本である⁽³⁾。

1960 年代学生運動は、発生件数の多さによっても、校舎のバリケード封鎖といった学生たちの直接行動によっても、また事態鎮圧に動員された機動隊と学生たちとの衝突によっても、テレビ・メディアの注目を集めた。たとえば、1968 年度版『NHK 年鑑』の「重要ニュースの報道および特集・特別番組」の項目には「大学紛争」が重要ニュースとして挙げられ、次のように記述されている。

〔昭和——引用者注〕43 年度は 100 を越える国・公・私立の大学で紛争がおこり、大衆団交、警察隊導入、校舎封鎖と闘争が拡大した。……〔NHK では——引用者注〕こうした一連の大学紛争を、その時点でタイムリーにとらえ、特別番組を編成するほか、『時の動き』、『スタジオ 102』などでも重点的にとりあげた。なお、放送はテレビ・ラジオ合わせて 98 本におよんだ。(有山 1999: 129)

とくに1969年1月18日から19日にかけて東京大学本郷キャンパスで機動隊が安田講堂に立てこもる全共闘の学生たちを排除した、いわゆる“安田講堂攻防戦”では、NHKと民放はともに特別番組の編成や実況中継を行ない、NHKの実況中継は44.7%という高い視聴率を記録した（有山1999: 48; NHK取材班1995: 223）。このように、1960年代学生運動についてはテレビ放送においてまとまった量のニュース・ドキュメンタリー番組が制作・放送されており、テレビ番組もまた1960年代学生運動研究の重要な資料となることが考えられる。

そこで本稿では、公募によって選ばれた研究者がNHKアーカイブス所蔵のテレビ番組映像を閲覧することができる「NHKアーカイブス学術利用トライアル研究Ⅱ・第3期」に採択された筆者の研究計画『NHKアーカイブスをとおして見る1960年代学生運動イメージの変遷』に基づき、映像アーカイブ調査による1960年代学生運動研究の展開可能性について考察することを目的とする。管見の限り、映像アーカイブ調査をもとにした社会運動や1960年代学生運動にかんする二次分析研究は、本稿が初の試みである。

1.2 先行研究と本稿の分析視角

テレビ番組など映像を対象とした社会学的研究は、これまでも映像社会学とマス・コミュニケーション研究を中心に進められてきた。前者の映像社会学では、その課題設定のひとつに、「映像の社会学」「映像体験の社会学」（石田2012: 10）が挙げられている。映像の社会学もしくは映像体験の社会学は、カルチュラル・スタディーズや記号論、映像学、物語分析に影響を受け、映像が文化的構築物であることを前提に、「映像そのものの意味の探究、社会における映像経験を吟味し分析する」（石田2012: 16）領域である。分析では、映像がどのような社会的現実の構築にどのように関わっているのか、という点に重点が置かれる（石田2012: 16-17）。後者のマス・コミ研究では、映像社会学は対照的なアプローチといえる、内容分析の手法が発展してきた。内容分析では、テレビ放送などメディアが発する「情報の内容」（小玉編2008: 57）がもつ傾向や偏り、さらには問題を、放送内容を抽出・コーディングすることで明らかにしていく（小玉編2008）。ここでは、映像と社会的現実の構築との関わりは前提とされていない。

こうした映像を対象とした研究に加え、さらに近年では、映像アーカイブを

用いた研究群が登場してきた。NHK アーカイブスは2012年から3年間にわたって、「NHK アーカイブス学術利用トライアル研究」「関西トライアル」を運用してきた。この制度による研究成果には前述した映像社会学的分析を行なっているもの（雀 2012; 小林・西田 2012）もあるものの、その多くが映像アーカイブという分析対象の性格を活かし、映像社会学的分析とマス・コミ研究的分析の中間的な性格となっている（船戸他 2012; 川島 2012; 木村 2014; 丸山 2013; Merklejn 2013）。つまりいずれの研究も、一方で通時的に大量の番組を閲覧し、その内容を記録・整理することで対象全体の傾向性を明らかにする方法論をとる点ではマス・コミ研究の方法論を踏襲し、他方でテレビ番組の内容が文化的構築物であることを前提にテレビ番組が構築してきた社会像やテレビ番組そのものの意味を分析のテーマとする点では映像社会学の方法論と共通している。映像社会学と異なるのは、分析対象が少数の番組に留まらず、扱う放送時期もより長期間にわたる点である。これは、大量の番組が時系列に沿って整理されており、かつ検索システムを利用して系統だって閲覧することができるという、映像アーカイブの特性を活かすべく登場してきた視角と言えよう。本論でも映像アーカイブを活用した先行研究の方法論を踏襲し、通時的に大量の番組を閲覧し、その内容を記録・整理したうえで、1960年代学生運動にかんするテレビ番組群の傾向を読み解くこととする。

また、このようにテレビ番組の記録が持つ傾向性を読み解く方法論は、NHK アーカイブス所蔵の炭坑・産炭地にかんする映像を分析した木村至聖が指摘するように（木村 2014: 59）、集合的記憶研究と親和性が高い。そこで、本稿の具体的分析視角を導出するにあたって、パトリシア・スタインホフによる日本の新左翼にまつわる集合的記憶の研究を参照したい（Steinhoff 2013）。新左翼は、1960年代学生運動と参加者・イシューの点で重なり合っており、相互作用しながら、同時期に高揚し衰退していった運動である。

スタインホフは、主にマスメディアや新左翼機関紙、参加者の手記、小説などを分析した。その結果、新左翼にかんする集合的記憶は、新左翼運動のみならず1960年代学生運動まで含んだ1960年代の若者叛乱全体を「危険な青年テロリストたちが全部やった無分別な暴力」（Steinhoff 2013: 163）として片付ける「支配的な集合的記憶」（Steinhoff 2013: 129）と、実際の参加者のネットワークのなかでのみ流通している、ともすればノスタルジックになりがちな「対抗記憶（counter-memories）」（Steinhoff 2013: 129）に分裂していると指

摘する。

新左翼運動にかんする支配的な集合的記憶が非常に否定的なものとなった要因について、スタインホフは次のように整理している。第一に、新左翼運動にかんする集合的記憶では、以下の3つの出来事がとくに大きな位置を占めている。①1967年10月8日、ベトナム戦争にかんする日本政府の対米協力に抗議する若者たちと機動隊との大規模な衝突（第一次羽田闘争）、②1969年1月18日・19日、東大で起きた安田講堂攻防戦、③1972年、連合赤軍内の大量リンチ殺人と連合赤軍による長野県あさま山荘での人質立てこもり事件（連合赤軍事件）である。第二に、①第一次羽田闘争から②安田講堂攻防戦にかけて、警察の取締り強化との相互作用によって新左翼諸党派の戦術が暴力性を増した。最終的に、一部の新左翼党派が地下に潜伏し犯罪活動に従事するようになり、その極端な帰結として③連合赤軍事件が発生した。第三に、当時のマスメディアは、新左翼運動についても学生運動についても過激化する暴力を集中的に取り上げる一方で、ベトナム戦争や日本政府による戦争協力、大学自治や学生の不当処分といった、抗議活動を引き起こしたそもそものイシューを十分に報じることがなかった。このため、浅慮な若者たちがふるう暴力が日本社会の秩序を乱しているというイメージが強化された。

そして、最も重要な要因として、第四に、①から③の出来事が、実際に起きた時系列とは異なった順序で人びとには経験される「時間の転倒」（Steinhoff 2013: 161）が起きた。集合的記憶は、のちに起きた出来事によって生み出された言説に適合的になるようにつくり変えられる性質を持つ（Steinhoff 2013: 160）。③連合赤軍事件が新左翼運動の衰退期に発生したこと、そのなかでも最終的に明らかになったのが、実際にはあさま山荘での人質立てこもりに先行して起きていた大量リンチ殺人だったことで、1960年代後半の新左翼運動・学生運動全体の「回顧的再解釈」（Steinhoff 2013: 161）が行なわれることになった。その結果として、「あさま山荘での人質立てこもりという犯罪性と粛清という凄惨な暴力とが、時間を遡って、東大闘争は社会秩序と若者世代の意欲を無意味に破壊しただけと捉える見方を強化した。……暴力のイメージをとまった回想は、1968年に起きた他の暴力的抗議活動も対象とするようになっている」（Steinhoff 2013: 162）。

さらには、参加者たちの対抗記憶も時間の転倒による回顧的再解釈から逃れられることはなかった。参加者たちは、運動そのものの目的や意義、参加

によって得られた経験については肯定的に記憶しつつも、新左翼運動もしくは1960年代学生運動全体の帰結としては敗北と見なす傾向があるという(Steinhoff 2013: 161)。

1960年代学生運動をテーマとするNHKのテレビ番組群では、スタインホフのいう回顧的再解釈が起きているのだろうか。また、スタインホフは、回顧的再解釈が生じた要因として連合赤軍事件における時間の転倒を挙げ、その結果形成された否定的な集合的記憶の表象として小説や映画を例示するに留まっており、各メディアのなかで回顧的再解釈が起きる具体的プロセスや仕組みは明らかにしていない。NHKのテレビ番組群で回顧的再解釈が起きているとしたら、それはどのようにしてか。さらに、歴史的な社会運動を研究する研究者は、回顧的再解釈によってつくられた現在の集合的記憶の枠組みをいったん相対化する必要がある。そうした相対化の可能性はテレビ番組群を分析することで見出せるのだろうか。本稿では、こうした点にかんして考察を進めていきたい。

以下では、まず、本稿の分析対象となるデータの基本的性格を示す(第2節)。そのうえで、NHKがとくに注目してきた〈東大紛争〉を取り上げ、長編ドキュメンタリーにおける回顧的再解釈の様相を明らかにするとともに、そうした回顧的再解釈を下支えしているのが、繰り返される同一映像の使用であることを示す(第3節)。最後に、回顧的再解釈から脱却するために、当事者の対抗記憶に基づくテレビ映像の資料的利用を提案する(第4節)。

2 データの基本的性格：〈東大紛争〉への注目

分析対象とするのは、上記の目的と分析方針に基づいて、筆者が2013年9月から2014年5月にかけて20回に分けてNHKアーカイブスで閲覧したテレビ番組映像である。まず、NHKアーカイブス所蔵のコンテンツを一斉検索することができる「NHKアーカイブス・データベース」を用いて、1950年1月1日～2013年9月9日の期間を対象に、「学生運動」「大学紛争」「全共闘」の3つのキーワードで検索を行なった。(表1)。

表1 NHK アーカイブス・データベースでの検索ワードとヒットしたコンテンツ数
(検索対象期間：1950年1月1日～2013年9月9日)

検索ワード	総コンテンツ数	うち1968年に 放送された本数	うち1969年に 放送された本数	うち ニュース映像数
学生運動	373	11	24	119
大学紛争	183	15	45	93
全共闘	259	8	131	181
合計	815	34	200	393

検索の結果該当した815コンテンツ⁽⁴⁾について、その推移の特徴を確認しておこう(図1)。第一に、1968年と1969年の両年に放送されたコンテンツ数が、いずれのキーワードについても突出していた。第二に、1970年代から1980年代中頃にはいったん減少したコンテンツ数が、「学生運動」に関しては1980年代後半に急増し、1969年をやや上回るほどになる。これは1980年代後半に、天安門事件をはじめとして、東アジア・東南アジアで学生を中心とする民主化運動が発生したためだと考えられる。第三に、「大学紛争」「全共闘」については1995年に再び目立って多くなるが、これは戦後50周年にあたるこの年、戦後50年を振り返る『NHKスペシャル』シリーズで1960年代学生運動が取り上げられたことによる。第四に、2000年代に入って各キーワードでふたたびコンテンツの増加を記録する。この理由としては、2007年以降の団塊世代の大量退職を受け団塊世代をテーマにした番組が放送されるようになったこと、2008年と2009年は1960年代学生運動の最高揚期から40周年にあたり、記念番組が放送されたことが考えられる。

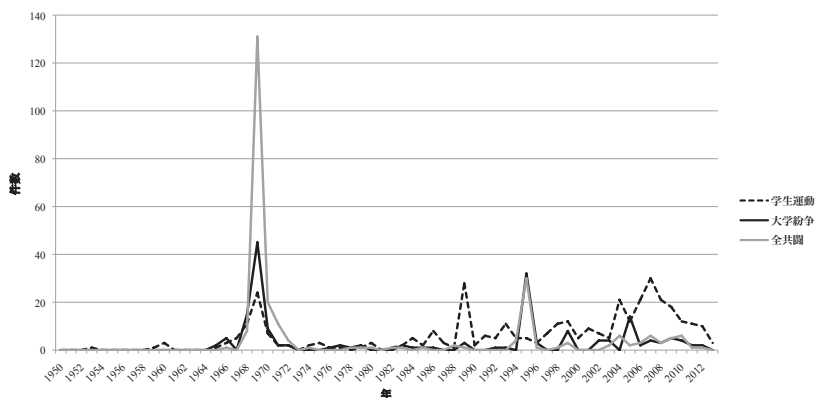


図1 NHK アーカイブス・データベースでのコンテンツ数の推移

さらに 815 コンテンツの内容について、番組タイトルと「NHK アーカイブス・データベース」上の「コンテンツ基本情報」から検討した結果、1960 年代学生運動が起きたさまざまな大学のなかでも、1968 年から 1969 年にかけて学園闘争が起きた東京大学への言及が目立って多かった（表 2）。とくに「大学紛争」と「全共闘」では、それぞれ 183 件のうち 43 件（23.50%）、259 件のうち 79 件（30.50%）と大きな割合を占めた。

表 2 東大への言及があるコンテンツ
（検索対象期間：1950 年 1 月 1 日～2013 年 9 月 9 日）

検索ワード	総コンテンツ数	うち東大への 言及あり	(%)
学生運動	373	16	4.29
大学紛争	183	43	23.50
全共闘	259	79	30.50
合計	815	138	16.93

上記の点を確認したうえで、表 1・図 1 の 815 コンテンツより詳細に内容を検討する番組を、次のような方針で手作業で抽出した。① ニュース番組を除外する。② ドラマや再放送を除外する。③ 残った番組から、タイトル、「コンテンツ基本情報」や「構成表」を参考に 1960 年代学生運動が主要な内容だと判断できるものを残す。④ ③で判断できない場合は、実際に閲覧し、1960 年代学生運動について短時間の言及に留まる番組を除外する。こうした作業から、1960 年代学生運動を主要な内容としている 23 番組が抽出された（表 3）。

表 3 のとおり、海外取材に基づく 4 番組を除いて、すべて〈東大紛争〉がテーマとなっているか、もしくは〈東大紛争〉への言及がある⁽⁵⁾。そこで本稿においても、NHK が注目してきた〈東大紛争〉に焦点を定めて検討することとする。なお、NHK では一貫して〈東大紛争〉という呼称が用いられていることに触れておきたい⁽⁶⁾。東大全共闘など学生としてこの運動に関わっていた者たちは、通常、東大闘争という呼称を用いる⁽⁷⁾。本稿は学生当事者が用いていた呼称を尊重する立場をとるため、以下では、NHK の番組について述べるときには〈東大紛争〉とカッコつきで示し、必要に応じて東大闘争と記す。

表3 NHKアーカイブス所蔵1960年代学生運動関連番組の一覧
(検索対象期間：1950年1月1日～2013年9月9日)

放送年月日	タイトル	放送系統	内容時間	〈東大紛争〉が 主要テーマ	〈東大紛争〉 への言及
1 1968年5月28日	NHK特派員報告 もえるパリ	総合	29分01秒	—	—
2 1968年6月4日	NHK特派員報告 激化する西独学生運動	総合	29分01秒	—	—
3 1968年7月18日	海外取材番組 海外の日本 第八集 西から見た日本	記録なし	30分	—	—
4 1968年12月30日	1968年ニュースハイライト この一年	総合	68分	—	○
5 1969年4月23日	海外取材番組 大学 第二集 学生運動の背景	記録なし	30分	—	—
6 1969年5月16日	現代の映像 大学新学期	総合	28分59秒	—	○
7 1969年12月30日	1969年ニュースハイライト この一年	総合	55分	—	○
8 1974年11月22日	ドキュメンタリー 武闘派	記録なし	28分39秒	—	○
9 1978年11月25日	ルポルタージュにっぽん おとこ東大どこへ行く～10年目の東大全共闘～	総合	29分	○	—
10 1995年9月2日	NHKスペシャル 戦後50年 その時日本は 第6回 大学紛争・東大全共闘26年後の証言	総合	59分	○	—
11 1999年5月3日	BS10周年企画 あの日の時 1968年(昭和43年)	衛星第1	50分	—	○ (注1)
12 1999年5月3日	BS10周年企画 あの日の時 1969年(昭和44年)	衛星第1	50分	—	○ (注2)
13 2003年10月26日	NHKアーカイブス 大河ドラマ「竜馬がゆく」 / ルポルタージュにっぽん「おとこ東大どこへ行く」	総合	80分	○	○ (注3)
14 2004年8月17日	視点・論点 全共闘と価値混乱	教育	10分	○	—
15 2005年3月11日	あなたと作る時代の記録 映像の戦後60年 青春 変わりゆく時代 変わりゆく情熱	衛星第2	120分	—	○
16 2005年10月8日	あなたと作る時代の記録 映像の戦後60年 1960～1975 疾走する日本・光と影	衛星第2	120分	—	○
17 2007年3月24日	ETV特集 あしたのジョーの、あの時代 団塊世代 “心”の軌跡	教育	89分	—	○
18 2007年4月29日	ETV特集 ホワッツ テラヤマ? 再考・団塊の青春	教育	59分	—	○
19 2007年7月23日	ハイビジョン特集 青春が歌われた日・戸井十門インタビュードキュメント	ハイビジョン	89分	○	—
20 2008年12月14日	ETV特集 加藤周一 1968年を語る 「言葉と戦車」ふたたび	教育	89分	—	○
21 2009年1月17日	NHKアーカイブス特集 安田講堂落城“あの日”から40年 学生たちのその後	総合	80分	○	—
22 2010年9月12日	ETV特集 シリーズ 安保とその時代 (4) 愚者の楽園へ安保に賛成した男たち～	教育	89分	—	○
23 2010年11月7日	NHKアーカイブス わたしが選ぶあの番組 (1) ～立花隆～	総合	70分	○	—

(注1) No.4「1968年ニュースハイライト この一年」が再編集された内容。

(注2) No.7「1969年ニュースハイライト この一年」が再編集された内容。

(注3) No.9「ルポルタージュにっぽん おとこ東大どこへ行く」が一部編集され、アナウンサーによる解説とともに放送された。

3 NHKのテレビ番組における〈東大紛争〉像

3.1 東大闘争の基本的経過⁽⁸⁾

ここで東大闘争の概略について説明しておきたい。東大闘争は1968年から1969年の2年間にわたって展開した、大学キャンパスを舞台とする学園闘争である。

医学部の学生たちによるストライキが全学に波及するかたちで始まったが、医学部生たちの当初の問題意識はインターン制度にあった。他大の医学生たちと連帯しながら長年続けられていたインターン制度廃止闘争は、1967年に当時の厚生省が登録医制度への衣替えを提案したことで登録医制度反対闘争へと引き継がれ、東京大学医学部では1968年1月29日に医学部の全4学年がストライキを開始した。このストライキのなかで、退学処分4名を含む合計17名という類例のない学生の大量処分が医学部当局によって行なわれ、しかも処分された学生のうち1名は処分理由となった事件に関わっていなかったことが明らかになる。登録医制度に学生不当処分の問題が加わり、医学部生と医学部当局の対立が決定的になった。

1968年6月15日に医学部生たちが本郷キャンパス・安田講堂占拠を敢行したところ、同17日、東大当局は学生たちを排除するために機動隊を導入した。機動隊をキャンパスに入れて学内問題の解決を図ることは、当時の学生たちや教員の感覚からすれば大学自治を侵す暴挙だった。6月26日の文学部を皮切りに各学部の学生たちは、抗議のために、続々と無期限ストライキに入っていた。7月には、学部ごとのストライキ実行委員会や新左翼諸党派が集まって「東京大学全学共闘会議」（東大全共闘）が結成される。そして夏休み明けの10月12日、法学部の学生たちがストライキを決議したことで、東大全学部が無期限ストライキに入るに至った。

東大闘争には2つの特徴がある。第一に、東大闘争が長期間に及ぶなかで、学生たちのあいだで、登録医制度や学生不当処分といった個別の問題を越えて、東京大学や研究者のあり方、さらにはそこで学ぶ自らのあり方を問う動きが生まれた点である。これは、全共闘が提起した「大学解体」や「自己否定」といったスローガンに端的に表れている。第二に、上記のような自己省察志向がある一方で、70年安保やベトナム反戦、沖縄返還問題をめぐるキャンパス外の抗議活動とも学生たちの行動は連帯しており、社会変革志向も持っていた。

無期限ストライキが全学で維持されたのは、約2ヶ月間だった。1968年11月に大河内一男総長が辞職すると、代わって総長代行に就任した加藤一郎法学部教授が精力的に事態打開にあたり、ストライキ収拾を求める学生たちとの交渉を進めていった。この交渉は、1969年1月10日に7学部の学生代表団と大学当局とのあいだで締結された「10項目の確認書」に結実し、これと前後して各学部でストライキが解除されていく。確認書締結後も全共闘系学生の一部は安田講堂占拠を続けたが、1月18日・19日の安田講堂攻防戦で排除された。

ただし、ここでただちに学生たちが抗議活動を中止したわけではない。全共闘系学生は確認書による闘争の終結に納得せず、再度の機動隊導入の責任を大学当局にたいし追及しようと試み、授業再開阻止にも動いた（清水 2014）。また、もっとも長期間にわたった文学部のストライキが終結したのは1969年12月だった。

3.2 長編ドキュメンタリー内の「時間の転倒」による「回顧的再解釈」

このような〈東大紛争〉をメインテーマとする長編ドキュメンタリーを、NHKは4本制作・放送してきた（表3内太字タイトル）。これらの長編ドキュ

メンタリーは、いずれも冒頭に安田講堂攻防戦が置かれ、攻防戦から番組を開始する構成が共通している。

東大闘争 10 周年の節目に放送された「ルポルタージュにつぼん おとこ東大どこへ行く ～10 年目の東大全共闘～」(1978 年 11 月 25 日、総合)⁽⁹⁾は、NHK アーカイブスに所蔵されている〈東大紛争〉にかんするドキュメンタリーのなかでは、最も古いものである。この番組は放送当時の駒場祭の様子を映したタイトル画面から開始し、ナビゲーター役の橋本治(イラストレーター・小説家)にたいする短いインタビューが流れると、次に安田講堂攻防戦のシーケンスに移る。番組開始から約 2 分後のことである。テロップが「東京大学 安田講堂 (1969 年 1 月)」と入り、攻防戦当日の安田講堂の空撮映像や講堂前で燃える炎などが映される。そこに、次のナレーションが重なる。

全学共闘会議派を支持する学生や労働者、約 500 人が全国から集まって、安田講堂に立てこもった。この日、政府と東大当局は 8500 人の機動隊を出動させた。2 日間にわたる攻防の末、631 人が逮捕された。全国に拡がる学園紛争のまさに天王山であった。

この後の「ルポルタージュにつぼん」は、全共闘側に加わっていた元学生 5 名と加藤一郎総長代行(当時)ら教官 2 名にたいする橋本治のインタビューによって構成されており、それぞれの立場から見た東大闘争の記憶が語られている。また、橋本治自身も東大闘争当時に東大の教養学部 2 年生だった。橋本がアトリエで語る次の言葉からは、とくに自己省察志向を共有していたことが伺える。

その、[社会の——引用者注] ルールを共有するとか、そのルールの場に乗っかるっていうことだけでも自分を騙しちゃうことになっちゃうわけですよ。……初めはそういうものかなと思ってても、だんだんだんだん正直になってっちゃうわけでしょう。正直になってしまえば、そういう言葉ってのはまだないわけで、あるとすれば「バカ!」「ナンセンス!」、そういう類の、なんてんだろ、石ぶつけるのと同じなわけですよ。言葉が石になって、ボンってぶつけるしかないわけで。だから、そういうかたちで論争を [したけれど——引用者注]、その、大学の先生とかね、マスコ

ミの人間とかはわからないわけですよ、みんな上の人間だから。だから、そういうの、全部やだったっていうのがほんとだと思っんですよね。

このように「ルポルタージュにっぽん」は当事者たちの言葉を生々しく伝えている。しかしながら同時に、冒頭に置かれている安田講堂攻防戦の映像は、スタインホフが新左翼運動の集合的記憶について述べた「時間の転倒」(Steinhoff 2013: 161)が、映像を用いて番組内で起きていることを示している。

安田講堂攻防戦の映像は、大学の象徴とも言える安田講堂の屋上にヘルメット姿の少数の学生たちが立ち、機動隊が圧倒的な人数と充実した装備で放水や催涙弾を向けてくるのにたいし、石や火炎瓶で対抗する様子を映している。炎や放水に囲まれる安田講堂の様子は、学生たちが大学キャンパスや社会の支持から切り離された孤立無援の状態にあり、暴力に訴えるまでに荒廃している印象を与える。

番組のなかで元学生たちが語る当時の問題意識や行動は、この安田講堂攻防戦の衝撃的な映像を冒頭に持ってくる長編ドキュメンタリー番組の構成によって、「回顧的再解釈」(Steinhoff 2013: 161)の影響を受けざるをえない。そこでは、日本の医学教育が抱えていた問題や学生不当処分問題などを引き起こした大学運営上の欠陥、さらには学生たちを先鋭化させたベトナム戦争や冷戦構造といった、学生たちにとっての初発の問題意識は背景に退く。また、1960年代運動が孕んでいた可能性は、本来ならば大学当局や警察・国家との相互作用のなかで長い時間をかけて減じていったはずであるが、こうした描き方ではあらかじめ低かったものとして見積もられる。その結果、いずれは攻防戦に追い詰められ圧倒的な力の差によって敗北するに至る、非合理的な行動として、1960年代学生運動を見る者に印象づけることになるのである。

1960年代当時のテレビ放送上は、東大闘争は安田講堂攻防戦で終結していない。たとえば1969年10月29日放送のNHKニュースに「授業再開の東大文学部 きょうも投石騒ぎ」⁽¹⁰⁾という項目があるように、安田講堂攻防戦以降も東大で学生たちがストライキや抗議活動を行っていたことが報道されている。しかし、安田講堂攻防戦のシーケンスを冒頭に置き、その後続く当事者たちへのインタビューをあらかじめ枠組みづける手法は、時をおいて製作されたほかの2本のドキュメンタリー、1995年9月2日放送「NHKスペシャル 戦後50年 その時日本は 第6回 東大紛争 東大全共闘・26年後の証言」

(総合)⁽¹¹⁾、2009年1月17日放送「NHK アーカイブス特集 安田講堂落城～“あの日”から40年 学生たちのその後～」(総合)⁽¹²⁾においても踏襲された。安田講堂攻防戦を1960年代学生運動にかんする記憶の帰結点／出発点に持ってくるドキュメンタリー内の時間の転倒とそれによる回顧的再解釈が続けられたことになる。

ただし、これはNHKのテレビ放送において、東大闘争の当事者たちの実感とは異なる編集がなされているという批判ではない。むしろ、NHKの1960年代学生運動にかんする長編ドキュメンタリーは、当時の学生の信念や心情に寄り添い、複雑な心の動きを丁寧に追ったものが多い。1.2で言及したように、1960年代学生運動の当事者たちが抱く対抗記憶も回顧的再解釈を免れない。当事者たちは、運動の目的や意義、個人的経験については肯定的に記憶しつつも、1960年代学生運動全体の帰結としては「敗北と失敗」(Steinhoff 2013: 161)と見なす傾向がある。安田講堂攻防戦を冒頭に持ってくる長編ドキュメンタリーの構造は、こうした回顧的再解釈に基づく当事者たちの対抗記憶とも適合的といえるのである。

3.3 繰り返される安田講堂攻防戦の同一映像の使用

さらに筆者は表3の23番組を閲覧するなかで、1960年代学生運動に言及する際に、安田講堂攻防戦を映した同一の映像が番組を越えて繰り返し使用されていることを発見した(図2・図3・図4)。放水される安田講堂、安田講堂に立てこもるヘルメット姿の学生たち、安田講堂に催涙弾をうちこむ機動隊員、これらは、今日わたしたちが〈記憶〉している安田講堂攻防戦の全要素を押さえている。この3映像はもともとひと続きで撮影されたと思われ、他のショットが3映像の前後に続くが、ここではとくに目立って多用されていると判断できた3カットを選び出した。各番組における3映像の使用の様子は、表4のとおりである。



図2 安田講堂攻防戦で放水される安田講堂 (13)



図3 安田講堂攻防戦で安田講堂上に立つ学生たち (14)



図4 安田講堂攻防戦で安田講堂に催涙弾を打つ機動隊員 (15)

表4 NHKアーカイブス所蔵1960年代学生運動関連番組における安田講堂攻防戦の映像使用

(検索対象期間: 1950年1月1日～2013年9月1日)

放送年月日	タイトル	図2 放水される安 田講堂	図3 安田講堂上の 学生たち	図4 催涙弾を打つ 機動隊員
1	1968年5月28日 NHK特派員報告 もえるパリ			
2	1968年6月4日 NHK特派員報告 激化する西独学生運動			
3	1968年7月18日 海外取材番組 海外の日本 第八集 西から見た日本			
4	1968年12月30日 1968年ニュースハイライト この一年			
5	1969年4月23日 海外取材番組 大学 第二集 学生運動の背景			
6	1969年5月16日 現代の映像 大学新学期			
7	1969年12月30日 1969年ニュースハイライト この一年	○	○	○
8	1974年11月22日 ドキュメンタリー 武闘派	—	—	—
9	1978年11月25日 ルポルタージュにっぽん おとこ東大どこへ行く～10年目の東大生共闘～	—	—	— (注1)
10	1995年9月2日 NHKスペシャル 戦後50年 その時日本は 第6回 大学紛争・東大生共闘26年後の証言	○	○	○
11	1999年5月3日 BS10周年企画 あの日あの時 1968年 (昭和43年)	—	—	—
12	1999年5月3日 BS10周年企画 あの日あの時 1969年 (昭和44年)	○	○	○
	2003年10月26日 NHKアーカイブス 大河ドラマ「龍馬がゆく」	○	○	○
13	／ ルポルタージュにっぽん「おとこ東大どこへ行く」			
14	2004年8月17日 視点・論点 全共闘と価値混乱	—	—	—
15	2005年3月11日 あなたと作る時代の記録 映像の戦後60年 青春 変わりゆく時代 変わりゆく情熱	—	—	— (注2)
16	2005年10月19日 あなたと作る時代の記録 映像の戦後60年 1960～1975 疾走する日本・光と影	—	—	— (注3)
17	2007年3月24日 ETV特集 あしたのジョーの、あの時代 団塊世代 "心"の軌跡	○	—	○
18	2007年4月29日 ETV特集 ホワッツ テラヤマ? 再考・団塊の青春	○	○	○
19	2007年7月23日 ハイビジョン特集 青春が晴わたった日・戸井十月インタビュードキュメント	○	○	○
20	2008年12月14日 ETV特集 加藤周一 1968年を語る 「言葉と戦車」ふたたび	○	○	—
21	2009年1月17日 NHKアーカイブス特集 安田講堂逐城「あの日」から40年 学生たちのその後	○	○	○
22	2010年9月12日 ETV特集 シリーズ 安保とその時代 (4) 患者の楽園へへ安保に賛成した男たちへ	○	○	○
23	2010年11月7日 NHKアーカイブス わたしが選ぶあの番組 (1) ～立花隆～	○	○	○

(注1) ただし、番組冒頭に〈安田講堂攻防戦〉当日の安田講堂の映像が挿入されている。

(注2) ただし、東大闘争に対する言及のうち、視聴者が撮影した〈安田講堂攻防戦〉当日の映像が主要な内容を占めている。

(注3) ただし、東大闘争に対する言及のうち、視聴者が撮影した〈安田講堂攻防戦〉当日の映像が主要な内容を占めている。

調査の結果、これらの映像が収められていたのは、「国内重要項目ニュース（資料用）東大紛争 封鎖解除に警官隊出動」（放送日不明）⁽¹⁶⁾であることが判明した。そして、3映像が使用された番組で確認できたなかで最も古いものはNo.7の1969年12月30日放送「1969年ニュースハイライト この1年」(総合)⁽¹⁷⁾であった。これは年末に1年の重要ニュースを振り返る内容で、1時間前後の長さの番組である。1969年には沖縄返還やアポロ11号の月着陸と並んで〈学園紛争〉が取り上げられ、〈学園紛争〉を扱うコーナーの冒頭に安田講堂攻防戦が置かれたあとに京都大学や広島大学、九州大学、早稲田大学、さらには都立日比谷高校と青山高校での学園闘争の様子が流された。ここでは時間の転倒は起きていないといえる。また、安田講堂攻防戦が1969年の「ニュースハイライト」に採用されたことは、第1節で触れた安田講堂攻防戦にたいするテレビ各局の注目と実況中継が獲得した高視聴率を考慮すれば当然である。

しかし、1969年の社会情勢をいわば要約した「ニュースハイライト」で使用された結果、安田講堂攻防戦の3映像は「ニュースハイライト」のなかの文脈を離れ、その後の番組製作においても、〈東大紛争〉、そして1960年代学生運動を象徴するものとして、繰り返し用いられるようになったと推察される。3映像は、ときに長編ドキュメンタリーの冒頭に置かれ、ときに1960年代学生運動に言及する際に象徴的に用いられることで、1960年代学生運動をテレビ番組をとおして知る／振り返る者に、回顧的再解釈の参照点を提供してきたのである。

3.4 小括

本節ではNHKのテレビ放送における、安田講堂攻防戦での失敗と敗北にいずれ至るものとして1960年代学生運動を描く「回顧再解釈」の様相を明らかにしてきた。1960年代学生運動にかんする長編ドキュメンタリーは、当時から10周年、戦後50年、当時から40周年という節目の年に制作・放送された番組であった。こうした記念番組は、現在の時点から過去を振り返る回顧的性格を本質的に帯びている。そこでは歴史は、われわれが知る帰結つまり安田講堂攻防戦へと至り、そして現在へと続く1本の道筋として描かれる傾向にあり、回顧的再解釈に回収されやすいのではないだろうか。

しかし、社会運動研究が展開過程と規定要因を明らかにしながら運動が孕んでいた意義や可能性に目を向けるものである以上、研究者は回顧的再解釈の枠

組みからいったん抜け出て、対象を見据える必要がある。では、NHK のテレビ番組で長年用いられてきた安田講堂攻防戦の3映像とは異なったかたちの1960年代学生運動像を、当時から50年近くが経過した現時点で研究者が明らかにするために、映像アーカイブをどのように活かすことができるだろうか。筆者は今回のアーカイブ調査から、映像アーカイブのさらなる検討が1960年代学生運動の新たな側面に光を当てるために有効だという結論を得た。次節で、対抗記憶の観点からこの点について実例とともに詳述したい。

4 対抗記憶と映像アーカイブの資料的利用

新たな1960年代学生運動像の析出に向けて、筆者は、1960年代学生運動の対抗記憶を踏まえた、映像アーカイブの資料的利用を提案したい。映像アーカイブの資料的利用とは、番組内の文脈や制作者の意図をあえて捨象し、映像や登場人物の証言を研究主体が観察する考え方である。具体的な対象のひとつには、長編ドキュメンタリーに登場する当事者の証言が考えられる。

東大闘争から50年近くが経過したいまに立ち、当時から現在に至るまで当事者たちが発表してきた手記や当事者のあいだで流通してきた資料、さらには独自の聞き取り調査といった、いわば対抗記憶の系と組み合わせる研究主体が考察を行なった場合、長編ドキュメンタリーに登場する〈東大紛争〉参加者たちの証言は、番組内部の文脈を越えて、新たな解釈を生じさせることがある。そして新たな解釈を与えられた証言は、それ自体が資料的価値を持つと考えられる。

NHK アーカイブスからひとつの例を提示しよう。2007年7月27日放送「ハイビジョン特集 シリーズ青春が終わった日・戸井十月インタビュードキュメント」(デジタルハイビジョン)⁽¹⁸⁾は、自らも1960年代学生運動の当事者である作家の戸井十月を聞き手とした番組で、日大闘争と東大闘争の参加者7名にたいするインタビューを中心に構成されている。1968年5月の日本大学での全共闘結成、1968年秋の東京大学の全学無期限スト突入、安田講堂攻防戦、さらには1969年5月に開かれた三島由紀夫と東大全共闘との討論会に至るまでの出来事が、インタビューを交えて時系列で追われる。

しかし番組を見ていくと、1968・69年の学生運動の時系列にインタビューを埋め込もうとする制作者の意図に反して、全く異なった解釈が可能な証言が浮かび上がる。たとえば東大全共闘に参加していた船曳鴻紅に、具体的にはど

のような活動をしていたのかを戸井が尋ねる場面がある。このシーケンスは、1968年秋に東大で全学部が無期限ストライキに入り、東大闘争の深刻化が決定的になった時期を描くにあたって挿入されている。戸井の質問にたいし、偵察や買い出しをしていたと答えた船曳は、続けて次のように語る。

ただ、あの、わたくしは、重要なことは、〔全共闘の——引用者注〕内側での議論が一番わたくしは重要だと思っています。それは、誰にとっても。まあ、そこで議論を闘わせた、あの、鍛えたっていうことは、自分の考え方を、まあ、そこでひとつ、つくっていくっていうことにはすごく役立ったんじゃないかな。

聞き手である戸井、またナレーションやテロップもこの証言に触れることなく、番組は1968年11月の出来事へと進んでいく。しかし、哲学専攻の大学院生として東大全共闘に参加した長谷川宏が、当時を振り返って書いた次の文章と関連づけて考察されるとき、この船曳の証言は別様の解釈に開かれる。

……いま、なにより印象深く思いおこされるのは、会議における息づまるような討論のおもしろさである。

会議の名は文学部闘争委員会。

時に応じて開かれるこの会議では……各自が自由に思うところを述べるのだったが、さまざまに対立する提案や見解の背後に、発言者の個性や思想性が浮かびあがるようになって、討論は、内奥の思いのぶつかりあう、ことばのドラマの観を呈するに至った。(長谷川 2001: 24)

東大闘争をはじめとして1968・69年の学生運動は、大学という、学生にとっての学びの場で起こった。学部や学科、クラス、研究室、サークル、部活を基盤に学生たちは闘争に参加していたのであり、当然ながら闘争中の学生たちの行動はそれまでの学生生活に規定されていた。学びの場で起きた闘争は、学生たち自身に大学や学びとは何かを問う機会となった。船曳や長谷川が東大闘争の最大の特徴として触れる議論討論のおもしろさは、東大闘争の特徴のひとつである自己省察志向を生み出した動力でもあった。

学生たちの日常的な議論の場がテレビ放送によって記録を残され、放送され

ることはほぼなかったと推察される。その結果、東大闘争の自己省察志向が学生たちにたいして持っていた魅力や意義は、テレビ番組における1960年代学生運動の回顧的再解釈の枠組みからははずれることになった。「戸井十月インタビュードキュメント」で船曳の発言が掘り下げられることがなかったのも、こうした要因によるだろう。しかし、当事者の手記などに書かれた対抗記憶を踏まえて新たな解釈を試みた場合、このように長編ドキュメンタリーのなかの証言は、機動隊との衝突や若者の無分別な暴力、青春の挫折とは異なり、学生による省察と学びのプロセスという1960年代学生運動がもっていた別様の側面やその可能性にわれわれの目を向けさせる。

こうした対抗記憶に基づいた映像の資料的利用の対象は、インタビューに留まらないだろう。映像アーカイブに保存されている、ニュース映像や報道番組、ドキュメンタリーなど豊富な映像資料が対抗記憶による再解釈に開かれている。

5 まとめ

本稿では、映像アーカイブの整備が近年進んでいることを背景に、これまで文書資料を主なデータとして行なわれてきた1960年代学生運動研究において映像アーカイブを活用する可能性について考察してきた。NHKアーカイブスに所蔵されている1960年代学生運動にかんするNHKのテレビ番組を対象に、スタインホフによる新左翼運動の集合的記憶研究を参照しながら、敗北と挫折に至るものとして1960年代学生運動を解釈する「回顧的再解釈」にかんして分析を行なった結果、次のことが明らかになった。第一に、NHKの長編ドキュメンタリーでは、1969年1月18・19日に東大で起きた安田講堂攻防戦の映像が冒頭に置かれるという番組内の「時間の転倒」によって、そのあとに続く当事者のインタビューの解釈が枠組みづけられるという「回顧的再解釈」が起きていた。第二に、1960年代学生運動を象徴するものとして安田講堂攻防戦を移した同一映像が繰り返し使用されていた。安田講堂攻防戦の映像からは、当時の学生たちの玉碎主義や狹隘な視野、そして敗北が想起され、回顧的再解釈を下支えしていた。

本稿ではまた、こうした1960年代学生運動像にたいして、新たな1960年代学生運動像は、当事者のあいだで流通する対抗記憶に基づいた、映像アーカイブの検討から見えてくることも示された。筆者は現在、先行研究が着手してこ

なかった1960年代学生運動当事者への聞き取り調査を進めている。これらの調査の結果を踏まえてあらためて映像アーカイブに向き合い、新たな1960年代学生運動像を析出することが今後の課題である。

注

- (1) 先行研究の少なさについては、小熊（2009a: 12）参照。
- (2) NHK アーカイブスの詳細はパンフレット「NHK アーカイブス学術利用 トライアル研究Ⅱ・関西トライアルⅡ」による。
- (3) 放送ライブラリー公式ホームページより（<http://www.bpcj.or.jp/> 2014年3月17日閲覧）。
- (4) NHK アーカイブス・データベースでの検索はすべて“コンテンツ”が対象となる。コンテンツはNHK アーカイブスが画像を管理する単位であり、番組とは異なる。NHK ニュースについてはニュースの内容ごとに映像が分かれ別々のコンテンツとして所蔵されている。ひとつの番組が複数のコンテンツに分かれて保管されている場合もある。
- (5) 表3の「言及」が意味するところは、〈東大紛争〉にかんするインタビューの証言、映像やナレーションを用いた〈東大紛争〉の経過説明などを指す。〈東大紛争〉の様子を映したカットを短く挿入する程度の扱いは含まれていない。
- (6) 最近の例としては、2014年1月30日放送「クロゾアップ現代 東大紛争秘録～45年目の真実～」(総合)がある。
- (7) たとえば、1969年4月に東大全学共闘会議が発行した書籍は『ドキュメント東大闘争 砦の上にわれらの世界を』（亜紀書房）と題されている。東大全共闘とは最終的に対立することになった日本民主青年同盟東大全学委員会が1969年5月に発行した書籍のタイトルも『嵐の中に育つわれら 東大闘争の記録』（日本青年出版社）である。
- (8) 医学部の経過は園田（1969）を、東大全体の経過は東大全学共闘会議編（1969）を参考にした。
- (9) アーカイブス ID・1002003102700090。
- (10) アーカイブス ID・1001969101410006。
- (11) アーカイブス ID・1001995090210124。
- (12) アーカイブス ID・1002009011800050。
- (13) 本図は「国内重要項目ニュース（資料用）東大紛争 封鎖解除に警官隊出動」（アーカイブス ID・1001969013110002）より作成。
- (14) 本図は「1969年ニュースハイライト この一年」（1969年12月30日放送、総合、

アーカイブス ID・1001969123010001) より作成。

(15) 本図は「1969 年ニュースハイライト この一年」(1969 年 12 月 30 日放送、総合、アーカイブス ID・1001969123010001) より作成。

(16) アーカイブス ID・1001969013110002。

(17) アーカイブス ID・1001969123010001。

(18) アーカイブス ID・002007072400157。

文献

安藤丈将, 2013, 『ニューレフト運動と市民社会: 「六〇年代」の思想のゆくえ』世界思想社。

有山輝雄監修, 1999, 『NHK 年鑑 第 21 巻 1968』ゆまに書房。

雀銀姫, 2012, 「儀礼と記憶: ドキュメンタリー『幻のイオマンテ〜75 年目の森と湖のまつり〜』を中心に」『社会情報学研究』16(1): 15-28.

江藤徹二, 2008, 「NHK アーカイブス」粕谷一希・菊池光興・長尾真他『図書館・アーカイブズとは何か』藤原書店, 234-235.

船戸修一他, 2012, 「テレビの中の農業・農村: NHK『明るい農村(村の記録)』を事例として」『村落社会研究』19(1): 37-47.

Gould, Roger V., 1995, *Insurgent Identities: Class, Community, and Protest in Paris from 1848 to the Commune*, Chicago: The University of Chicago Press.

長谷川宏, 2001, 『哲学者の休日』作品社。

石田佐恵子, 2012, 「ムービング・イメージと社会: 映像社会学の新たな研究課題をめぐって」『社会学評論』60(1): 7-24.

——, 2014, 「映像アーカイブズと質的研究の展開」『フォーラム現代社会学』13: 133-143.

川島高峰, 2012, 「戦後放送メディアにおける『終戦特集』の形成: NHK 短編映画『広島』(1957 年 8 月 15 日放送) が登場するまで」『明治大学社会科学研究所紀要』50(2): 271-301.

木村至聖, 2014, 「『記録』された炭坑の『記憶』と映像アーカイブの可能性: 筑豊炭田の事例を中心に」『ソシオロジ』59(1): 57-73.

小林直毅・西田善行, 2012, 「テレビアーカイブとしての『水俣』」『社会志林』58(4): 85-119.

小玉美意子編, 2008, 『テレビニュースの解剖学: 映像時代のメディア・リテラシー』新曜社。

丸山友美, 2013, 「『日本の素顔』における『よきジャーナリズム』: 『客観的』ドキュメンタリーの模索」『社会志林』60(3): 77-98.

McAdam, Doug, 1988, *Freedom Summer*, Oxford: Oxford University Press.

- Merklejn, Iwona, 2013, “Remembering the Oriental Witches: Sports, Gender, and Shōwa Nostalgia in the NHK Narratives of the Tokyo Olympics,” *Social Science Japan Journal*, 16 (2): 235-250.
- NHK 取材班, 1995, 『NHK スペシャル 戦後 50 年その時日本は 第 3 巻 チッソ・水俣 工場技術者たちの告白 東大全共闘 26 年後の証言』日本放送出版協会.
- 小熊英二, 2009a, 『1968 上 若者たちの叛乱とその背景』新曜社.
- , 2009b, 『1968 下 叛乱の終焉とその遺産』新曜社.
- 大野道夫, 1990, 『『青年の異議申立』に関する仮説の事例研究：社会主義運動仮説と新しい社会運動仮説を対象として』『社会学評論』41 (3): 234-247.
- Steinhoff, Patricia, 2013, “Memories of New Left Protest,” *Contemporary Japan*, 25 (2): 127-165.
- 清水靖久, 2014, 「銀杏並木の向こうのジャングル」『現代思想』42(11): 200-219.
- 園田隆也, 1969, 『東大医学部 闘争の記録と教育の未来像』徳間書店.
- Tilly, Charles, 1995, *Popular Contention in Great Britain 1758-1834*, Cambridge: Harvard University Press.
- 東大全共闘会議編, 1969, 『ドキュメント東大闘争 砦の上にわれらの世界を』亜紀書房.
- Young, Michael P., 2001, “A Revolution of the Soul: Transformative Experiences and Immediate Abolition,” J. Goodwin, J. M. Jasper, and F. Polletta eds., *Passionate Politics: Emotions and Social Movements*, Chicago: The University of Chicago Press, 99-114.
- 油井大三郎編, 2012, 『越境する 1960 年代：米国・日本・西欧の国際比較』彩流社.

謝辞

本稿は「NHK アーカイブス学術利用トライアル研究Ⅱ・第3期」のもと行なわれた研究成果の一部である。テレビ映像の閲覧にあたってはNHK アーカイブス・トライアル研究事務局の阿部康彦さん（当時）、豊島圭子さん（当時）にお世話になりました。この場をかりて深謝申し上げます。

付記

なお本稿は、文部科学省科学研究費補助金（特別研究員奨励費、平成 25 年～26 年度）による研究成果の一部である。

Images of the 1960s' Student Activism in TV Programs

——Sociological Approach to Visual Archives——

Ryoko KOSUGI

Recent advances in information technology have allowed researchers to explore new types of materials. This paper, by using visual materials in NHK Archives which are exclusively open to selected researchers, aims to investigate how images of the student activism in Japan in the late 1960s have been constructed in TV documentaries of NHK. Referring to the discussion of negative collective memories on Japan's New Left by Steinhoff (2013), I find that the “inversion of time” within the TV documentaries causes “retrospective reinterpretations” on the student activism. The violent and painful sequences of “the Battle of Yasuda Auditorium” at the University of Tokyo in January 1969 are put at the very beginning of the documentaries although in reality it was one of the outcomes of the activism. As a result, in the TV documentaries the whole student activism seems to have been destined for dreadful failure and defeat ahead of time. Moreover, the same sequence of the Battle has been used in many programs when NHK describes the 1960s' student activism in any way. The recurrent images of the violent Battle and desperate students also support the retrospective reinterpretations. I also suggest that we should turn to counter-memories which circulate among those who participated in the student activism of the late 1960s when we try to reinterpret the visual images.